●学部報告●　　心理科学部

心理科学部臨床心理・言語聴覚セミナー

阿部和厚，中野　茂

現在，日本の大学は，教育においても，研究においても，いかに組織的にレベルアップしていくかが問われている．個々の教員がそれぞれの考えで大学に関わっていればよいというのでなく，相互連携，協働で大学の個性，力を発揮していかなければならない時代である．とくに，北海道医療大学のような中小規模大学は，教員全員が力をあわせて教育力，研究力をあげていかなければならない．この記事は，開始して４年となった「心理科学部臨床心理・言語聴覚セミナー」の記録（経緯と各回の内容）である．

北海道医療大学心理科学部は，2002年４月に臨床心理学科と言語聴覚療法学科の２学科で開設された．臨床心理学科はその５年前に当別キャンパスに設立された看護福祉学部の臨床心理学担当教員を中心として発足し，言語聴覚療法学科はあいの里にその10年前に設立された札幌医療福祉専門学校の言語聴覚療法学科が前身であった．先行する薬学部，歯学部，看護福祉学部が講座制をいれているのに対して，本学部は講座制をとらない形であった．いわゆる伝統的大学の学部のなかで理系学部が講座制をとり，文系学部が講座制をとっていないことと較べると，文系学部の形となっている．

臨床心理学担当の教員のほとんどは，文系学部の大学教育の伝統の中で育っている．言語聴覚療法学科は，前身の専門学校の10年の伝統をつぐ形で開始された．大学教員としてのトレーニング期間となる助手はなく，教員はすべて個室にこもり，互いがどんな人物か，教育に対してどんな考え方をもっているのか，どんな研究をしているのか，ほとんどみえない形のスタートであった．いわば大学の日常からは，この学部の発展がみえてこない状況であった．

幸いに，学部開設時の新任教員の中には，他の大学での長い経験のある教員や講座制で育った教員もいた．大学の理系学部で育った教員は，自らの研究を世界の中で位置づけることで研究が成り立つ．他から学び，常に自分を客観視しながら，同僚と協働することが身に付いている．言語聴覚療法学科の中で，研究や学部・学科としての教育のあり方が全くみえない状況，大学らしい雰囲気がない居心地の悪さを何とかしたいとう声があがり，開設年度後期から，月に１度でもよいからセミナーという形で勉強会をしようということになった．言語聴覚療法学科教員の有志で「言語聴覚セミナー」としてとにかくはじめることになった．

学部は，言語聴覚療法学科からみても臨床心理学科とともにあることは利点となる．この勉強会では心理学担当の教員の話もききたい．進行中の研究紹介ということで，学会の予演もよい．また，各教員の力を学科，学部でできるだけ共有したい．さらに，将来を担う学生にもこの学部で行われている研究の香りを伝えたい．そのために，ポスター掲示で案内し，教員，学生にともに公開するようにした．

第１回言語聴覚セミナーは，阿部和厚を世話人に，2002年が９月23日（火）午後４時から，本学講義室２－１にて行われた．その記録を紹介する．

日時の紹介のあとで，つぎのように記載されている．

「言語聴覚士養成教育に長年かかわってきた森寿子　教授の熱い思いが参加者に伝わるお話でした．学生23人，教員・事務10人あまりを前に70分ほどの話，そして活発な質疑がとび，120分のなごやかな会となりました．患者から学ぶ，医師とチーム医療，人として優しく，感性が豊かなこと．この大学の特色を生かす教育から大学院へ，

患者を身近にみることのできる教育環境，時代をになう指導者の輩出を期待．参加の学生たちも将来に大きく視野を広げることができました．言語聴覚だけでなく，臨床心理の教員も参加し，共同体であることがうれしい好スタートのセミナーとなりました．」

セミナーは，第３回目には，臨床心理学科の近藤清美教授による発達心理にかかわる研究の話しも加わった．また，本学の活動を知ってもらうこと，および他大学，研究者との連携への発展を期待すると，ホームページで他にも公開，参加勧誘をしたらよいとなり，この係を買って出た吐師道子助教授も世話人となった．現実に，学部外からの参加もみられるようになった．また，セミナーは学部の活動として，大学の点検評価記録にも記載された．

2003年度には，就任の遅れていた教員もそろい，その中で，中野　茂教授から，学部として研究紹介等を内容とするセミナーを持つべきだとの提案があり，すでに同様の趣旨で始めていた言語聴覚セミナーを，拡大したいということになった．これは，教授会で審議され，「心理科学部研究交流会」による「臨床心理・言語聴覚セミナー」として，毎月２回，原則としては，教授会と教員会議のある日に開かれることになった．いわば，学部として正式に公認された活動としての位置づけとなった．話題提供は，基本的には，討論もいれて60分，臨床心理学科と言語聴覚学科の教員が交互，アイウエオ順で担当することにした．ただし，その最初は，記念すべき会として，高橋憲男学部長による学部設立にこめた理念を伺う会とした．

その最初の広報文を紹介する．

「第５回 臨床心理・言語聴覚セミナー（言語聴覚セミナーを拡大）４月22日（火）」「この度，心理科学研究交流会が発足し，これまでの言語聴覚セミナーは臨床心理学科と言語聴覚療法学科との合同による臨床心理・言語聴覚セミナーに発展しました．毎月第２，４火曜日に行われます．各教員の学問的興味，研究について，自由な雰囲気で話し，聴き，討論しあう勉強会です．学会発表の内容紹介，他大学等の研究者の講演なども適宜行います．相互刺激，研究共有から，プロジェクト研究が立ち上がるなど，心理科学部の研究がより活性化されることを期待します．」「話題提供：高橋憲男　教授，話題：心理科学とは（心理科学部で学ぶ学徒 必聴）．心理科学部の専任教員は開設２年目で全員がそろい，セミナーがリニューアルされます．日本で唯一の名称である「心理科学部」の将来，学問展望に対する思いを，高橋憲男　学部長からうかがいます．心の科学，臨床心理，コミュニケーション障害等で科学的証拠にもとづいたアプローチとは何でしょう．この学部は何を目指すのでしょう．学生諸君もふくめ，多数ご参加くださいますよう　ご案内いたします．」

また，これを契機に，学部のシンボルマークを阿部がデザインした．心理をあらわす脳と心臓，言語をあわらわす内耳と声帯をロゴ風にデザインし，さらにこれを交叉するように配した．交流を意味する．マーク下には　この学部の英文頭文字を置いた．

その後，世話人は，中野　茂，吐師道子，阿部和厚でつづけられた．セミナーは一般には隔週の火曜日に開催された．次回の話題提供者は，決まっていたので，セミナー開催の次週のはじめには，話題提供者から，題名，短い内容紹介をもらい，ポスターを製作し，各教員へメールで案内し，さらにポスターをカラーでプリントして，これをＡ３に拡大コピー（８枚）し，事務を通じて学内に張り出すようにした．これらの作業では，中野が臨床心理学科のとりまとめ，阿部が言語聴覚療法学科のとりまとめを行い，ポスター製作等の広報は阿部が担当した．ホームページへの掲載は，はじめ吐師助教授が担当したが，後には安東孝治講師が担当した．

2005年度には，前期に２回行っただけであった．

これで学部創設時の教員が一巡した．この年度に２順目に入れなかったのは，学部完成年度を迎え，とくに阿部が言語聴覚療法学科の学科長となり，2006年度からの大学院の開設準備，および学科のカリキュラム改訂準備のために，セミナーへの気配りができなくなったためでもあった．しかし，セミナーは大学院の言語聴覚学専攻では，「コミュニケーション障害学特論」としてカリキュラムにとりいれられた．修士課程２年，博士課程２年で，それぞれ15回の履修が求められる．

大学院生は，研究指導教員の専門性に入り込み，大学・学部・学科としてのアイデンティティを身につけないことになりかねない．近年，大学院でも，体系的カリキュラムによる授業を展開することが求められている．「コミュニケーション障害学特論」は，両専攻の研究内容を紹介するものであり，心理科学研究科として，両学科の共通科目として重要な位置づけとなる．また，これは，大学院の正式の科目として，また，趣旨からして，大学院生，学部学生，それに教員すべてが参加できるように配慮されなければならない．言語聴覚療法学科では，この時間帯には授業や会議を入れないようにした．

2006年度は，学部完成年度を終え，新たな一歩を生み出す年度となった．臨床心理・言語聴覚セミナーも６人の新任教員を迎えて，新任教員シリーズとして再開され，2006年最後のセミナーは第36回目であった．これらのセミナーは学内でもユニークな形であり，松田一郎新学長から学内全体にも案内すべき内容と，注目され，学長が参加し，討論に加わったものもあった．

このようなセミナーは，回を重ねると，ごく少数の人数しか参加しなくなってくる傾向がある．今日，本学では，教育，研究で，教員相互の連携が強く求められている．そして，研究には，各学部での共同研究を支援する体制も進められようとしている．教員の研究力の相互理解と相互支援は，学部にとって必須のものとなる．そのためには，これまで行ってきた臨床心理・言語聴覚セミナーがさらに活性化される必要がある．各教員は，これに参加し，活発な討論を展開して欲しい．参加は，自分が所属する学部をもり立てていく責任意識の表現形の一つでもある．教員の姿勢は，学生，大学院生を触発し，団体力によってこの学部を発展させていく将来がみえてくる．セミナーの内容には，学外へ公表する価値のある優れたものも多い．印刷物やホームページ掲載などを通じて大学を紹介していくことも必要となろう．

〈臨床心理・言語聴覚セミナーの記録〉

第１回　2002年９月24日（火）

「言語聴覚士の仕事と教育について－歴史からみた課題－」

心理科学部教授　森　寿子

言語聴覚士の仕事内容，ニーズ，扱う患者，障害，言語聴覚士になるための学習，日本の言語聴覚士が国家資格となってきた歴史，言語聴覚士の未来

第２回　2002年10月22日（火）

「言語発達遅滞のWPPSI（幼児知能診断検査），WISC-R（成人知能診断検査），ITPA（言語学習能力診断検査）による検討」

心理科学部講師　山路めぐみ

「サイトメガロウイルス感染症による重複障害聾児に対する人工内耳の装用－その意義と限界」

「先天性重複障害聾児への人工内耳装用上の問題－ＡＤＨＤ合併例の経験から」

心理科学部教授　森　寿子

第３回　2002年11月26日（火）

「アラビア数字，漢字，仮名の書字における脳内情報処理機構の差異－神経心理学的考察－」

心理科学部講師　田村　至

書字における脳内情報処理機構の研究

愛情はコミュニケーションをささえるか？－絆の発達と分かちあい－」

心理科学部教授　近藤清美

新たな研究の方向性を探る現在進行中のプロジェクト

第４回　2003年１月28日(火)
「X線マイクロビームを用いた調音研究の目指すもの」
心理科学部助教授　吐師道子
X線マイクロビーム調音データベースを用いての調音運動研究

第５回　2003年４月22日（火）
「心理科学とは」
心理科学部教授　高橋憲男
日本で唯一の名称である「心理科学部」の将来，学問展望に対する思いを，科学的証拠にもとづいたアプローチについて語る.

第６回　2003年５月13日（火）
「内耳の蝸牛に新しい世界をみる」
心理科学部教授　阿部和厚
走査電子顕微鏡による観察で阿部らが開いた内耳蝸牛の新しい世界を紹介し，機能形態学的研究について理解

第７回　2003年５月27日（火）
「身体的アプローチによる臨床技法」
心理科学部助教授　阿部一男

第８回　2003年６月10日（火）
「言語障害児の支援について—教育・福祉の新しい取り組み」
心理科学部講師　石川美子
制度の変革にともない，現実的取り組みがどのように変わったかを紹介

「聴覚障害者の＜自己発生音＞評価と適正化訓練」
心理科学部講師　林　良子
自分が発する音（声，せき，くしゃみ），生活で生じる音（ドアの開閉音，足音‥），機器に出させる音（テレビ，バイク，洗濯機・・）など，聴覚障害者が気にしている自己発生音について

第９回　2003年６月18日（水）
「運動障害性構音障害のリハビリテーション：歯科医がはたす役割について」
昭和大学第一口腔外科講師 和久本雅彦

第10回　2003年７月８日（火）
「パラトグラフィーによる構音の評価」
心理科学部教授　今井智子
パラトグラフィーは舌と口蓋の接触様式を観察する方法：正常発話者のパラトグラム所見を中心に，舌切除患者の接触パターンについても紹介

第11回　2003年７月22日（火）
「人間のこころと動物のこころ」
心理科学部教授　岩本隆茂

第12回　2003年７月24日（木）
「乳児の間主観性と音楽的コミュニケーション」
英国エディンバラ大学心理学科名誉教授　コルウィン・トレバーセン博士.
臨床心理学科の客員教授として，中野　茂教授の紹介により，近藤清美教授通訳で，母親の言葉の持つ音楽性(musicality) によるコミュニケーションについて講演

第13回　2003年９月30日（火）
「骨格筋の肥大ー血管新生の面からー」
心理科学部教授　太田　勲
咬筋の発達過程における血管内皮細胞増殖因子の発現タイプと発現量の変化

第14回　2003年10月21日（火）
「失語症の言語科学ー音韻論，統語論，意味論における研究動向」
心理科学部教授　亀井　尚

第15回　2003年10月21日（火）
「発達障害幼児に対する音楽療法」
心理科学部講師　今井常晶

第16回　2003年11月11日（火）
「大脳における言語機能の局在と病態—病巣研究の現在とfMRIによる機能画像の知見－」
心理科学部助教授　大槻美佳

第17回　2003年11月25日（火）
「A Comparison of Attitudes Toward English－Japanese at Home and Abroad」
心理科学部講師　ジョナサン・ウォルシュ
英語に向き合う態度の比較－母国と外国での日本人－
（日本語で講演）

第18回　2003年12月９日（火）
「“時・場所・人”と神経学」
心理科学部教授　田代邦雄
神経内科とは？神経学の歴史から最先端の話題までを紹介

第19回　2004年１月27日（火）
「心はことばをどのように計算するのか?」
心理科学部講師　齊藤惠一

第20回　2004年２月26日（火）
「気管切開例に対する音声コミュニケーションのリハビリテーション」
心理科学部講師　中山剛志
通常，気管切開例のコミュニケーション・アプローチは音声に頼らない代替コミュニケーション手段の獲得を目指すことが多いが，可能な限り音声という効率のよいコミュニケーション手段の獲得を目指すことが患者さんの機能回復に結びつくことを紹介

第21回　2004年５月10日（月）
「不安と抑鬱の認知行動療法」
心理科学部教授　坂野雄二

第22回　2004年５月24日（月）
「情報教育と機器の利用－コンピュータリテラシーから情報リテラシー中心へ」
心理科学部講師　畠山彰文

第23回　2004年６月７日（月）
「ロールシャッハ・テストの将来展望－テストのデータベース構築を目指して」
心理科学部講師　高瀬由嗣

第24回　2004年９月21日（火）
「成人失語症者の自発話能力評価法の開発」
七沢病院言語科言語聴覚士　高橋真知子

第25回　2004年10月18日（月）
「フランスの神経心理事情」
心理科学部講師　田村　至

第26回　2004年11月１日（月）
「“遊び心”のコミュニケーションを探る」
心理科学部教授　中野　茂

第27回　2004年11月29日（月）
「プリオン病－最近の話題」
心理科学部教授　森若文雄

第28回　2004年11月17日（月）
「器質性障害の精神医学」
心理科学部教授　中野倫仁

第29回　2005年５月31日（火）
「聴覚障害児の聴能と音声能－実験的手法による基礎的研究の結果を中心に」
心理科学部講師　安東孝治

第30回　2005年６月28日（火）
「英語のリズム・日本語のリズム」
心理科学部講師　小松雅彦

第31回　2006年６月13日（火）
「発生・分化の分子機構」
心理科学部教授　及川恒之
細胞はどうやって個々に固有の性質をもつようになるのか？

第32回　2006年６月27日（火）

「歌声の科学」

心理科学部助教授　榊原健一

喉歌（ホーミー）の研究を中心に，オペラ歌唱など世界の歌声の発声の仕組みについて紹介

第33回　2006年７月11日（火）

「32ビットFORTHの開発」

心理科学部教授　貞方一也

プログラミング言語FORTHと16ビットFORTHを紹介し，32ビットFORTHの開発およびそのグラフィックスと数値計算への適用

第34回　2006年７月25日（火）

「脳倫理―倫理の新たな地平」

心理科学部教授　小野滋男

ＳＦ映画『マイノリティ・リポート』を鑑賞（ごく一部），その主題である決定論と自由意志の問題から，脳科学と倫理の問題を序章的に探究

第35回　2006年10月24日（火）

「ロラン・バルトについて」

心理科学部助教授　柳田　寛

変貌するバルト，多様の顔をもつバルト，ロラン・バルトの仕事の軌跡を追跡

第36回　2006年11月14日（火）

「月経周期性の認知変動」

心理科学部助教授　冨家直明

月経前不快気分障害者の月経周期に伴う気分変動は知られているが，認知変動は議論されていない．心理学的手法や誘発電位脳波等を使用して行っている研究について紹介